

「もう話す人がいなくなったら」——
被爆 81 年、証言を託す人と受け継ぐ若者たち

戦後 100 年となる 2045 年へ——
上白石萌音の語りで、記憶をつなぐ“旅”が始まる

『あの日から 100 年
100 Years Since Those Days
—平和を未来に繋いでいくために—』
9月 21 日(月・祝)深夜1時 55 分～2時 25 分放送
放送終了後、FOD・TVer にて配信

フジテレビでは、9月21日(月・祝)深夜1時55分より、ドキュメンタリー番組『あの日から100年 100 Years Since Those Days —平和を未来に繋いでいくために—』を放送することが決定しました。



『あの日から 100 年 100 Years Since Those Days —平和を未来に繋いでいくために—』
(C)フジテレビ

本作は、戦後100年を迎える2045年に向けて、被爆の記憶を受け継ぐ人々を記録するドキュメンタリー番組です。

広島と長崎に原子爆弾が投下された「あの日」から 81 年。被爆の痕跡を伝える建物や資料、被爆樹木が残る一方で、あの日の惨禍を直接体験し、自らの言葉で語ることをできる人々は年々少なくなっています。

「もう話す人がいなくなったら、あの壮絶な状況を誰が伝えるのだろうか」

番組が見つめるのは、広島・長崎で被爆した切明千枝子、大橋和子、佐藤美津紀、三田村静子の証言。そして、その思いを受け取り、次の世代へ手渡そうとする高校生・塩野花菜と、小学6年生・細井奏志の姿です。長崎で平和活動に取り組んできた塩野は、核兵器の恐ろしさを自分の目で確かめるため、初めて広島を訪れます。細井は小学3年生のときに聞いた三田村の被爆体験を受け継ぎ、小学5年生から最年少“伝承者”として活動しています。戦争を知らない若い世代は、被爆者の言葉をどう受け止め、次の世代へ何を伝えていくのか。被爆の記録と向き合う姿、そして被爆者たちとの対話を通して、「記憶を受け継ぐ」ということの意味を見つめます。

戦争という過ちを二度と繰り返さないために、私たちは何を受け取り、何を伝え、どう行動していくのか。戦後 100 年となる 2045 年の未来へ向けた、旅の始まりを上白石萌音の語りとともに届けます。

2人の若者が被爆地である広島、長崎を訪れ「あの日」と向き合う

長崎の高校2年生・塩野花菜が原爆について深く考えるようになったのは、小学2年生の校外学習がきっかけでした。そこで原爆の被害を知った塩野は、自ら調べた内容をレポートにまとめ、その後も長崎で平和活動に取り組んできました。しかし、同じ被爆地である広島を訪れたことはありませんでした。核兵器がどれほど恐ろしいものなのかを、自分の目で確かめたい——。そんな思いを胸に、塩野は初めて広島へ向かいます。そこで目にしたのは、教科書や授業で得た知識だけでは受け止めきれない、被爆の現実でした。

もう1人、長崎を訪れるのが小学6年生の細井奏志。細井は小学3年生のとき、長崎で被爆した三田村静子の体験を直接聞きました。三田村の証言を受け継ぎ、小学5年生から、その記憶を自分の言葉で伝える“伝承者”として活動。番組では、被爆体験を語り継ぐ最年少の伝承者として紹介され、叶えたい将来の目標を真すぐに語ります。

知識として知る「あの日」と、現地で触れる「あの日」。2人は何を受け取り、どのような言葉を持ち帰るのでしょうか。

校庭での火葬、遺体と間違われた少女——被爆者たちが語る「あの日」

広島で被爆し、長年にわたって自身の体験を語り継いできた切明千枝子。原爆が投下された当時、現在の高校1年生にあたる年齢だった切明は、学徒動員によってたばこ工場で働いていました。激しい閃光と爆風によって工場の機械が倒れ、同級生が下敷きとなって命を落としました。学校へ戻った切明たちを待っていたのは、建物疎開の作業現場から、全身に重い火傷を負って戻ってきた下級生たちでした。誰が誰なのか分からないほどの傷を負い、1人、また1人と息を引き取っていく生徒たち。生き残った上級生だった切明は、亡くなった下級生の遺体を校庭で火葬するよう命じられます。炎の熱によって遺体の手足が動くのを見た切明は、「まだ生きているのではないか」と叫びました。そのとき、教師から告げられた短い言葉。顔を背けることも目を閉じることもできないまま、切明は目の前の光景を見続けました。80 年以上が過ぎた今も消えることのない記憶を、切明が静かに語ります。

広島で被爆した大橋和子は当時 12 歳。建物疎開の作業に動員されていた午前8時 15 分、空を見上げた瞬間、激しい光と爆風に襲われました。目の前にいた友人が盾となったことで一命を取り留めましたが、その友人と再び会うことはありませんでした。重い傷を負い、遺体と間違われてトラックに積み込まれた大橋。声を出すこともできない中、彼女はいかにして自分が生きていることを伝えたのでしょうか。さらに救護所では、焼け残った1枚の名札が大橋の運命を変えます。叔父が後に“1分間の奇跡”と呼んだ、生還までの経緯が語られます。

「ゆっくりと、長く続けて」証言を託す人と、受け継ぐ若者たち

長崎で被爆した佐藤美津紀は、長年、自らの体験について沈黙を守ってきました。しかし、日本被団協のノーベル平和賞受賞をきっかけに、胸の奥にしまってきた記憶を語り始めます。長い沈黙の末に証言を始めた佐藤は、講演会で、被爆者の言葉を次の世代へ伝えようとする高校生・池田晃輔と出会いました。池田を応援するつもりだったものの、むしろ自分の方が励まされたと振り返ります。

長崎で被爆した三田村静子の証言を語り継いでいるのが細井です。細井が真剣に証言する姿を見た三田村は、そのひたむきな姿勢に感銘を受け、尊敬していると語ります。一方、自分がいつまで語り続けられるかは分からないため、だからこそ細井に、「ゆっくりと、長く続けてほしい」と願いを託します。被爆者から若い世代へ、ただ言葉を引き継ぐだけではありません。細井が語る姿に、三田村自身も希望を見いだしていきます。

平和を「願う」から「行動する」へ 2045 年まで続くプロジェクト

番組では、平和を「願う」だけでなく、具体的な「行動」へつなげる新たな取り組みも紹介します。

「第1回 PEACEシンポジウム2026」には、NPO・NGO、企業、学術、行政、メディアなど、さまざまな立場の人々が集結。平和について考え、行動することを、環境問題と同じように社会の「文化」として根付かせるための展望が語られます。『あの

日から100年 100 Years Since Those Days ―平和を未来に繋いでいくために―』では、2025年から20年をかけて、戦争経験者や平和を願い行動する人々を取材します。国連創設100周年、そして戦後100年を迎える2045年の映画公開を目指す長期プロジェクトです。

「教えてください」から、「伝えていきます」へ

戦争を知らない世代が被爆者の声を受け取り、自分の言葉で未来へ手渡していきます。『あの日から100年 100 Years Since Those Days ―平和を未来に繋いでいくために―』は、過去の記憶を記録するだけでなく、これからの100年を考えるためのドキュメンタリーです。

世界各地で戦争や紛争が続く今だからこそ、私たちは何を受け取り、誰に伝えていくことができるのか。平和の意味を改めて考える本作を、ぜひご覧ください。

◇ 番組概要

- タイトル: 『あの日から100年 100 Years Since Those Days ―平和を未来に繋いでいくために―』
- 放送: 9月21日(月・祝)深夜1時55分～2時25分
- 配信: 放送終了後、FOD・TVerにて配信
- 語り: 上白石萌音
- スタッフ: 企画: 荒井俊雄
プロデュース: 山下航平、品田直哉
プロデューサー: 菊池真介、前田 要
監督: 橋本英樹
取材協力: テレビ新広島、テレビ長崎、認定NPO法人PEACE DAY
制作: FCC、KIDS-COASTER
制作著作: フジテレビ

◇ FOD 概要

FOD (<https://fod.fujitv.co.jp/>)はフジテレビ公式の動画・電子書籍配信サービスです。月額1,320円(税込)の「FODプレミアム スタンダードコース」は、ドラマや映画など10万本以上の作品と200誌以上の雑誌が見放題・読み放題。70万冊以上の電子書籍も楽しめます。さらに、毎週金曜はTOHOシネマズの映画を1,200円(税込)でお得に鑑賞できる特典「FODフライデー」も提供中です。

Formula 1®が視聴できる「FOD F1™プラン」詳細はこちら: <https://fod.fujitv.co.jp/f1/register>

The logo for FOD (Fujitv On Demand) is displayed in a large, bold, red sans-serif font.